

研究と教育の半生を振り返って

——最終講義に代えて——

小田野 正 之

はじめに

編集委員会から仮題として与えられたテーマは標題のとおりであるが、「研究と教育」といえば大学教員に課せられた責務そのものであり、退職を控えた筆者が前任校を含めて26年間のそれを振り返ってみると、素晴らしい先輩・同僚に支えられて、それなりの努力を積み重ねてきたつもりでも、浅学非才の身のため顧みて忸怩たるものがあるし、また余りにも大きなテーマのため、こうして書きながらも執筆をためらう気持ちはすこぶる強い。

しかし、〈内容も形式も全く自由で、気軽に原稿を〉とのことであるので、論文調でなく、退職前の最終講義のようなつもりで、筆者なりに来し方を振り返りつつ、今の学生諸君にぜひ伝えておきたいと思うことを、どう理解されるか一抹の危惧の念を抱きながら、貴重な紙面を借りて小文にまとめ、責めを果たさせていただきたい。

いうまでもなく、筆者の大学における音楽、なかでも声楽、なかでもその表現手段として不可欠の声の研究と指導は、日常の意志や感情の伝達手段としての言語音声の研究までを含めて、単なる興味・関心だけで選んだ道ではなく、そこに至る前半生が原因で進んだ道である。そしてその前半生を過ごした時代こそが筆者及び同世代にとって決定的意味があり、今の学生諸君にぜひ伝えるべきだと思うので、また今の学生諸君には高校で日本の現代史、特に第2次大戦前後を十分に学んで来なかった者が非常に多いという現状に鑑み、諸君の現在と未来を考える上で、この国の近過去の事実を具体的に知って善悪を含めて考えていただきたいたいと、筆者の体験を通してその辺りの概略から述べさせていただくことにする。したがって小文は、見方によっては関係なさそうな〈戦争〉と〈大学生活〉の二つの部分よりまとめることにする。

芸術への目覚め

筆者が旧制中学校（神奈川県立横浜1中）に入学したのは昭和10年4月であった。この学校は、当時日本の玄関として世界に向って開かれ明るく活気に満ちていた横浜と、隣りの首都東京からも俊秀を集め、リベラルな校風で、先生方もユニークで優れた方々が集まっておられたが、こゝでわれわれは端正で学問的情熱に燃えるひとりの若い国語科の先生のご指導を受けることになった。この方が今もご活躍の万葉集の権威であり、文化功労者・阪大名誉教授・文博の犬養孝先生である。筆者は小学校時代に「子供の科学」や大人向けの「科学画報」を愛読書として育ち、自然科学に限りない好奇心を燃やして、眼は常に外側に向いていたが、教科書教材に関連させながらも古今の日本の詩歌・散文・随筆などを幅広く情熱を込めて講義される先生の授業に心を奪われ、こゝで初めて眼は内側に向き、人間というものを見詰めるようになり、合わせて人間が構成する社会にもいくばくかの関心を向けはじめた。授業は楽しく待ち遠しく、こゝから学問とともに人間文化の大きな領域の芸術に眼が開かれていったのである。

そして一方では、放課後の図書館で繙いた美術史の本で、筆者の家系の一族で日本初期洋画（油絵）の先覚者で秋田蘭画の開祖であり、平賀源内の紹介で杉田玄白の「解体新書」の解剖図も描いた小田野直武を知り、関心は急速に文学から美術に向かい、少ない小遣いを溜めて求め

た油絵の道具で、卒業まで油絵制作に傾倒していった。そして上級学校進学は多くの級友が目指す旧制高校ではなく、当然のように上野の東京美術学校油絵科へとひとりで心に決めていた。家では勉強の合い間に父の本棚から漱石全集の初版本を抜き出しては耽読していたし、学校では級友と出陣の「哲学以前」、倉田百三の「愛と認識との出発」、阿部次郎の「三太郎の日記」などについて語り合いつつ、楽しくまことに充実した中学校生活を送っていた。

近づく戦争の足音

だが、こうした生活の背後では、筆者たちの気付かぬうちに不気味な動きが始まっていた。なかでも昭和11年の2月末、中学1年の3学期も終りに近づいた大雪の朝、わが国の社会を揺るがす2・26事件が勃発、きわめて大きなショックを受けた。顧みると昭和6年秋の満洲事変以来、上海事変、支那事変と打続く戦乱に、出征兵士を送り英霊の無言の凱旋を迎える回数は年毎に増し、日本の社会は確実に暗い方向へ進んでいることは肌で感じていたが、中学校の教科に「軍事教練」があってやや疎ましく感じたていどで、筆者たちはまだ学問や芸術に情熱を燃やし、将来のことに頭が一杯であった。

そのうち、人類学や考古学に関心の強かった2歳年上の実兄は、将来の日本のことを考えたのであろうか、旧制高校への進学をあきらめて5年生の夏に海軍兵学校を受験して第70期生に合格、海軍士官への道を歩み始めた。父は兄のこともあり社会情勢を考えたのであろう、筆者の美校進学希望を頑として聴き入れなかったが、上野の東京音楽学校卒の従姉や同校児童学園に通う実妹もあり、少しは理解があったのか美術でなく音楽ならと、しぶしぶ許してくれたのは卒業1か月前であった。

こうしてお定まりの浪人生活に入ったが、社会は緊迫の度を増してこの年令の無職者は国家の命令で軍需工場へ徴用される恐れがあった。止むなく私立音楽学校に通い、続けて東京音校受験準備のために各種の個人レッスンに通ったが、このころ日本は欧米列強より徐々に経済圧迫を受け、対米外交交渉は暗礁に乗り上げ、不安で深刻な社会情勢は日毎に高まっていた。そして、昭和16年12月8日遂に日本政府は米英両大国を相手に同時に太平洋戦争に突入した。世間ではこの非常時に筆者たちのように音楽の勉強などする者は非国民と非難し、声楽の勉強も押入れに潜って声が洩れないように気をを使うほど、日本社会は異常な興奮状態に変化してきた。そして音楽学校でも軍事教練は行われ、ピアノを弾く手に重い38式歩兵銃を握り野山を駆けめぐる日が増えていった。

それでも努力の甲斐があり、翌17年4月には施設・設備・教授陣の調った唯一の官立音楽学校の東京音楽学校（現東京芸大音楽学部の前身）の予科声楽部に合格、晴れて音楽家の卵として希望に燃えた学生生活が始まった。専門の声楽レッスンは週に2回、1コマ90分に学生2～3名という徹底した個人指導で、筆者は声楽科主任のK教授の門下生として膨大な数の日・独・伊の芸術歌曲に取り組んだし、ピアノをはじめ各種実技、理論、歴史、美学、倫理学、語学、音声学などでカリキュラムは埋まり、戦時下とはいえまことに充実した学生生活であった。生活面では食糧や衣料が逼迫して切符による不十分な配給制となったが、世間は緒戦のハワイ・マレー沖の海戦の大勝利に酔って浮かれており、戦争は学生にとってまだそれほど身近なものではなかった。

わが家では、兄が開戦直前に海軍兵学校を卒業して戦艦比叟に乗艦、ハワイ攻撃の機動部隊に参加、続いて内南洋や印度洋の各地に転戦し、この年の6月からは空の第一線指揮官たるべく霞ヶ浦海軍航空隊に転勤、飛行学生として猛訓練のかたわら、毎週末には自宅に帰省して家族を喜ばせていた。とはいえ、17年6月のミッドウエーの大敗戦については軍極秘のためか一切

語らず、帰省のたびにその顔が引締まってきたのを見て、訓練の激しさのためかと想像していた。

徴兵猶予撤廃と学徒出陣

当時、日本には旧帝国憲法のもとに徴兵制が布かれ、満20才に達した男子は、家柄、貧富、学歴などの別なく、ひとり残らず徴兵検査を受け、その結果にしたがって兵役に就く義務を負わされていた。しかし、大学、高等学校、専門学校（いずれも旧制）に在学中の者は、たとえ成年に達していても卒業まで徴兵が延期されるという特典があり、学校での軍事教練が徐々に強化されたとはいえ、一応卒業まで専門の勉強に専念することができた。だが戦争が激しくなるに従い、これらの上級学校の修業年限は徐々に短縮され、昭和17年度からは卒業が9月に繰り上げられ、校門を出るとともに続々と戦列に加えられていったのである。このような中で昭和18年1月9日、わが家にとってまことに悲嘆にくれる事態が起った。それは実兄の飛行機事故による殉戦で、筑波おろしの凍てつく烈風の中での訓練飛行中に空中接触のために同期の少尉3名とともに墜落即死したのである。その悲しみは筆舌に尽くし難いが、海軍葬の前後にみた同期の方達の真摯な猛訓練や遺族への暖かい心遣いに触れるうち、筆者の心には学校卒業後の兵役義務はでき得れば海軍航空隊へ進み、亡兄の遺志を継ごうという決心が生れてきた。

学校はこの年の4月に予科を卒業して本科に進んでいたが、同月18日全く予期しなかった米爆撃機隊の最初の東京空襲があり、幾つも低空で飛びながら爆弾をばら撒く黒色のノースアメリカンB24を見るうち、われわれ在学生の軍隊入りも、あるいはそう遠い将来ではないだろうと予測されてきた。夏休みには農家の食糧増産への勤労奉仕や軽井沢での軍事教練合宿で、勉学にはおちおち専念できなかったが、休暇が明けると間もなく、10月2日になって遂に大学・高・専の文科系学生に対する卒業までの徴兵延期の特典は、勅令により撤廃された。筆者はこのとき満20才6か月でまさしくこの措置に該当する。対米英濠蘭開戦から既に2年近く、戦局はわが国にとって容易ならぬ段階に達し、遂に来るべきものが来たのだ。21日には降りしきる冷たい秋雨のもと、明治神宮外苑競技場では文部省主催の出陣学徒壮行会が厳肅莊嚴に行われ、東條首相の「諸子勇ましく征け」の訓辞、岡部文相の壮行の辞、出陣学徒代表の「生等もとより生還を期せず」の答辞が終わると、東大以下、国・公・私立の大学、高・専の77校3万の武装した学徒は、各自の感懐を胸に秘め、皇居前を目指してびしょ濡れで行軍に移ったが、筆者はその中の一人であった。学校でも出陣学徒の告別演奏会が行われ、最後の独唱のステージをつとめ、恩師のK教授も一夜お宅で最後のレッスンをしてくださった。筆者は今生の思い出に先生の伴奏で、シューベルトの「冬の旅」全24曲の通し演奏をして、万感胸に迫る中で芸術との最後の別れを告げたのである。

海軍飛行科予備士官へ

数日して学徒だけの臨時徴兵検査が行われ、筆者は「甲種合格、陸軍歩兵」と宣告されたが、亡兄の遺志を継ぎたいと無理に海軍を志望したところ認められて、12月10日横須賀第2海兵団に入団、最下級の二等水兵として酷しい軍隊生活が始まった。こゝで飛行科士官への選抜テストに合格、以後は三重海軍航空隊で士官教育、宮崎の富高海軍航空隊で中間練習機教程、兵庫の姫路海軍航空隊で実用機教程の艦上攻撃機操縦^(註1)を専攻し、日々悪化する戦局を背景に言語に絶する猛訓練を続けたが、その間のことは紙幅の関係で省略する。

(注1) …航空母艦搭載の実用機は、戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機の3種があるが、艦上攻撃機〈略して艦攻〉は高々度からの水平爆撃や低高度の空中から魚雷を発射する任

務の単発3人乗り小型機である。

特別攻撃隊編成

昭和20年2月になると、軍令部は極限にきた厳しい戦局に対処するために全海軍の教育活動はすべて停止し、各地の戦闘機、艦攻、艦爆、陸攻、水上機などの実用機教程練習航空隊を打って一丸として第10航空艦隊を編成、その所有全機を挙げて特別攻撃^(注2)による戦線参加を命令してきた。後に続くはずの搭乗員養成を停止とは、まさに国家存亡の最終段階である。

(注2) …飛行機による爆弾攻撃は、前記注1の水平爆撃のほか、艦上爆撃機による急降下爆撃があるが、いずれも機上で、風向・風速・目標の進行方向と速度・自機の高度や速度などの諸元を計測・計算して、到達時に目標に命中するように爆弾を投下する。猛訓練を重ねて命中精度は上げられるが、機体から離れた後の爆弾の方向は自由に制御できないので、確率は100%とはならない。そのためこれを確実に100%にして乏しい機材や爆弾で国を守ろうと、搭乗員は爆弾を投下せずに行ったまま、飛行機もろともに目標に突入するという確実な戦死を伴う攻撃法が特別攻撃である。昭和19年秋のレイテ海戦以来、搭乗員の至純・至高の同胞愛と責任感から始まった決死でなく必死の特殊攻撃法であり、戦争末期には航空特攻のみならず、艦艇による水上特攻、潜水艦による水中特攻も行なわれた。

こうして姫路空(〇〇航空隊を略して〇〇空という)でも2月8日に特攻隊編成の訓示と参加希望調査があったが、最後にきた戦局と家族のことを思いつ、も全員が参加を熱望した。翌々日には筆者が学生長をつとめる特修学生11名の少尉候補生を含む、飛行隊長兼分隊長の佐藤清大尉以下60名余の特攻隊氏名発表があり、選抜に洩れた学生や練習生の飛行訓練は停止され、限られた機材・燃料はすべてわれわれの特攻訓練にのみ使用され、早速に黎明・午前・午後・夜間の猛訓練に明け暮れたのである。そのうち四国沖の敵機動部隊から飛来するのであろうグラマンF6Fなどの姫空への空襲も日毎に回を増し、3月9・10日のB29による東京空襲では焼夷弾により大部分が焦土と化して10万近い都民の死者が出たという情報が入った。3月16日には最後の生命線といわれた硫黄島が敵手に落ち、その夜内地では神戸への夜間大空襲があった。姫空の飛行場から六甲の山脈の向うの燃える夜空を眺めて、われわれの出撃も間近いと身も心も緊張するうち、22日になるといよいよ司令部から出撃命令が到着した。翌23日早朝飛行場では冷酒とするめで永遠の別れの式を済まし、司令以下全隊員の打ち振る帽に見送られて離陸した姫路空特攻隊の全機30数機は、瀬戸内海上空を経て一路西下、昼前には大分県の宇佐海軍航空隊に着陸し、第10航空艦隊艦攻特攻隊として合流した。

特別攻撃に出撃

4月8日、敵のB29の空襲最中の鹿児島県串良基地に進出、沖縄防衛立体作戦の菊水作戦に従事することになった。6日には世界最大の戦艦大和を中心とする水上特攻艦隊が目と鼻の先の佐多岬沖を通過して、東支那海で撃沈されて3千の将兵が海の藻屑となったことも知らず、また同日に姫路空佐藤大尉以下13機39名と宇佐空の山下大尉以下14機42名もこの基地から発進して全機突入未帰還となったことを聞き、覚悟を新たにしながら、連日連夜出撃の僚機を〈帽振れ〉で見送りつつ、出撃待機と空襲退避に明け暮れた。月が移り5月になり、10日に菊水6号作戦で翌朝黎明の特攻出撃命令が到着、筆者は姫路空の白鷺誠忠隊長に任命された。姫路空からは総指揮官の佐藤清大尉以下63名の上官・同僚・部下が既に突入戦死されており、待ちに待っていた命令である。既に遺書も書いた。専門の芸術への未練も無い訳ではないが、なによりも眼前の

現実を直視すると、肉親をはじめ愛する人々——同胞が悲惨な目に遭うのを1日でも延ばせるなら、美しい国土を破壊から少しでも救えるなら、俺達の死は意味があり、これが現時点の青年として最高の生き方であると、既に突入戦死した友とも語り合い自らも納得してきた。翌朝の黎明攻撃は敵が照準しにくいように日の出直後の太陽を背にして低空から突入予定。気持ちは平静で興奮も起らず、静かに自分達の責任を感じているだけだ。翌朝は午前3時起床、国土の最後の触感を味わいながら真暗な夜道を滑走路横の指揮所へ急いだ。午前5時前後に宇佐、百里原、姫路の順で、特攻機中最大の800斤爆弾を抱え、基地全員の〈帽振れ〉に見送られて暁闇の中を1機ずつ離陸、沖縄本島中城湾の敵艦を目指して針路に入った。修羅の戦場までは2時間余、途中には敵の戦闘機群が幾重にも待ち構えているはずだ。ふと地上を見下すと、家々は未だ深い眠りの中、桜島の噴煙も鹿児島湾の波も穏やか、針路前方の開聞岳は暁の空を背景に美しいシルエット、心の中で愛する人々と祖国の幸せと攻撃の成功を祈りつつ、徐々に高度をとった。

そのうち、操縦桿を握る筆者の耳に、エンジン音の僅かな異常が響いてきた。計器盤の指針にはまだ異状はない。そのうち排気管から赤い焰と黒い煙を吐きはじめた。発動機故障、進撃高度への上昇も不可能となった。このため沖縄到達は到底不能と判断し、予備機と交換して出直そうと、断腸の思いで列機と別れ、爆弾を抱えたまま基地へ帰投した。しかし直ぐに使える予備機は1機もなく、翌朝には機材不足で特別攻撃隊解散を令せられた。暫し呆然、先に逝った友たちを想い、涙が後から後から溢れた。その後は百里原と神之池の二つの基地を経て、戦争末期には山上のカルパルトから射出され、連合軍側にはまだ無かったジェット推進の特攻機の桜花43型で、紀州沖の敵機動部隊に突入のため、比叡山の725空へ移り、ここで終戦を迎えたが、筆者はいまだに生き残ったのか死に残ったのか判然としない深い感慨を持ち続けている。

戦争体験を振り返って

以上は、僅か50年前に筆者や仲間の学生達が体験した歴史的事実のドキュメントであり、他にももっと悲惨な状況の中で無念にも死なねばならなかった例が無数にある。明治以降のわが国の青春史の中でも稀有な例であろう。これを読まれた今の学生諸君は、どのような読後感を持たれたことであろうか？戦後の現行憲法下に生れ育ち、あり余る物資の中に生活する感覚からは、想像もできないかも知れない。またいまの憲法下では絶対に起り得ないことで、自分の生き方になんの参考にもならないと感じる者もあるかも知れない。しかし、歴史は過去から現在を経て未来へ繋がり、温故知新ということばもある。いまの社会がこのまま未来永劫に続く保障はどこにもない。既に改憲論を口にする政治家もいる。この国でも弥生時代から部族間の戦争があり、遺跡からも多くの武器が発掘されているが、戦争の意義やそれを始める者や機関の問題と戦争に駆り出されたり巻き込まれて第一線で生命を賭けねばならない者の生死は、別次元で深く考える必要があると思う。また、歴史上の事柄の意味を認識するには、現在の社会や生活感覚を基準にするのではなく、その時代のその場所に身を置いて考えなくては分からないといわれる。いまの諸君と同じ年頃の当時の若者達が、いかに生き、いかに悩み、いかに死んでいったかは、多く出版されている戦没学徒の遺稿集を通して、虚心に耳を傾け、今後を生きる糧として深く知っていただきたいと思う。

あの戦争で海軍航空隊だけでも学徒出身士官が2485名も、空に海に陸に散った。このほか艦艇や陸戦隊や陸軍へ入隊した者を含めるとその数は膨大なものになるであろう。当時、大学や高校や専門学校などの高等教育進学者は、現在とは桁違いに少なく、その中から数多の俊秀を失ったのだ。若し生き残れば現在の社会各分野で指導的立場での大活躍が想像されるだけに、まこ

とに痛恨極まりなく慟哭を禁じ得ない。

太平洋戦争とは何だったのか？それは、後世の内外の歴史家が客観的に広く深く分析して、公正な評価を下すであろうが、既に英国の著名な歴史学者のクリストファー・ソーンは、白人の側の東洋人に対する黄禍論的動機についても述べており、近代の列強の帝国主義の衝突という側面もあるだろうし、戦後半世紀を経てもまだ定説はない。とはいえ、国が滅亡に瀕したとき、自らの任務を強い責任感と同胞愛のもとに生命を賭して遂行した諸先輩の偉業は、永く後世に伝えられねばならないと考えるし、諸外国でも体制の如何を問わず、国に殉じた人々の崇高な行為は正当に評価して慰霊顕彰を続けており、それを怠った国や民族は栄えた例はない。大戦直後の東京国際裁判史観は、まだ各国で疑問視されたり反論も続いている現状である。大切なことは、前にも述べたが、戦争そのものの正否と、その中に死んで行った人々の人間性は、はっきり区別して考えるべきだと思う。

反戦平和は筆者の心からの願いだが、世界はいまなお民族的、政治的、宗教的対立から、多くの人々の血が流されており、地球上紛争は絶え間ない。戦争は歴史や文化や人間そのものを破壊し去る。いまの日本社会は一応平穏に見えるが、日本近現代史上これほど歪んだ時代があったかどうかと疑わざるを得ない一面もあり、将来についてはいささか不安を感じざるを得ない。いま平穏裡に学問や芸術を探究する諸君は、社会や戦争の実態をしっかりと見据え、力強く平和を創造して欲しいと心底から祈る。その意味で世間の平和運動をみると、中には“もう戦争は嫌だ”との感情論が先行して、底の浅いものも見受けられるが、冷静に人間を追究し、政治や社会を分析して、再び政治屋や兵器産業の死の商人に自分の運命を托すことのないよう、“平和を守る”という受身的立場でなく、“平和を創り出す”という能動的立場で、国際社会に認められ得る国を創っていく必要があると考えられる。

人間が人間である以上、地球上から戦争は無くならないという意見もあるが、解決には武力でなく理性と粘り強い話し合いによるべきだと思ふ。理想主義的で非現実的といわれようが、現在の平和憲法を世界の理性と良心に働きかけて意識改革を訴え続けることこそ、日本の国際貢献ではないかと考え続けるこのごろである。

戦後と教職

筆者たちは在学中に休学の形で、戦争の第一線に参加した。敗戦の際は戦没者と自分の来し方を思つて呆然の一時を過ごしたが、復員して家に帰ると、社会の価値基準は全く覆つて混乱し、将来計画を立てようにも情報は一切なく、その日の食糧にも事欠く状態だった。だが軍隊入り前の勉学を一応続けようと、占領軍の濫歩する中を縫うように上野へ行き学校へ復学届けを出した。校長はじめ各科主任教授は軍部へ協力のかどで追放され、校舎はいたみ放しで、まさに廃校寸前であったが、復学を許可されると、筆者達の復員学徒は早速文部省へ日参して学校再開を訴え、一方では筆者たちで教官を探してきて、やっと再開されたのは戦後1年を経た昭和21年9月であった。入学時の同級生は戦時中の短縮措置のまゝ終戦直後に卒業したが、筆者たちは1学年下がり、4年制に戻った制度で22年3月に卒業した。そして旧制都立中学校に就職しつつ、遅れた分を取り返そうと、研究科、聴講科で勉学を続け、24年からは母校の東京音楽学校非常勤講師も兼務した。

21年11月には新しい日本国憲法が公布され、筆者が本科を卒業した22年には、教育基本法と学校教育法が公布され、ちょうど学制改革の時機であったが、授業を担当した新制中学生たちは、それまでの軍歌調から解放され、音楽というものの美しさに触れていきいきと勉学にいそしんでいた。筆者は通勤の便のために25年から品川にある都立高校に移っていたが、27年2月になる

と声楽家の研究団体の「二期会」が発足し、その旗上げ公演の「ラ・ボエーム」ではアルチンドロの役を、また同年秋の文部省主催第1回芸術祭のオペラ公演では、日本ではじめての全曲上演「フィガロの結婚」のアントニオの役を与えられ、またその他の演奏会や放送でも歌唱や演技に没頭して、それなりの評価をいただき嬉しく有難かった。しかし、演奏が認められても、筆者の心の中にはいつも虚しく納得できないものが残った。

このころの筆者にとって最大の喫緊事は、芸術の内容とも関係が深いのではあるが、特攻を契機として最大関心事となった「人間とは何か」の命題の解明だったのである。そして音楽を止めて大学の哲学科への進学を、真剣に考えはじめていたのである。しかし、恩師のK先生は筆者の訥々とした話をじっくり聴いてくださり、「音楽で哲学しろよ」と諭してくださった。こうして音楽の追求に一層固い決心で励むようになっていった。

一方、高校勤務では、筆者より10歳若い生徒たちの学級担任や教科担任として、授業や部活動で多くの生徒と接するうち、海綿が水を吸うように筆者が身につけたものを吸収して日々伸びてゆく姿を見て、嬉しく楽しく、この生徒たちに筆者の世代が過した前車の轍を踏ませたくないという夢中の毎日を過した。部活動では同僚の先生とともに、本物の音楽を目指して、発声法の基礎から音楽作りまで徹底的に指導して、NHKのコンクールの高校合唱の部で5回の全国優勝文部大臣奨励賞に輝いたのは忘れられない思い出となった。これが影響したのであろうか、都教委からの奨めもあり、昭和41年からは19年間の高校の現場指導を離れ、教育行政の末端を担う都教委指導主事となり、全都の幼・小・中・高の指導助言という立場で、夏冬の休みもない超多忙の生活が始まった。教育庁指導部時代は、西多摩の村から南の島まで連日全都を駆けめぐり、夜は遅くまで法規や教育学の研修という5年間のこの職務の間に、教育現場の実態との関わりの中で教育というものを考える機会を与えられたのは、まことに得難い体験であった。

そして昭和46年に東京学芸大より声楽教官へのお招きをいただき、永年身に付けてきた声楽という専門分野の知識や技術と指導主事の経験を活かして、有能な教員養成のお役に立ちたいと、地方公務員を退職した次第である。この間昭和20年代より、文部省教材等調査研究委員会（中学校高等学校音楽小委員会）の委員として、3回に亘り中・高の学習指導要領作成に参画できたのも、後の教員養成の仕事にとってまことに得難い体験であった。

思えば、音楽学校で音楽科教員養成をめざす師範科出身でなく、作曲や演奏の音楽家養成をめざす本科を卒業しながら、演奏より教育の道に生き甲斐を見出したのは、やはり、特攻出撃の体験から、常に「人間とは、生きるとは、国とは、戦争とは」と問い続けてきた一本道の所為であろう。思辨哲学より実存哲学に親近感を覚え、単純で直情的な性格を自認しながらも、つねに本物や価値を志向するのは、特攻という稀有な異常体験の影響が大きいと自覚している。特攻戦死した親友が存命中に人間の幸福について話し合ったとき、古今東西の思想家や哲学者の立派で教えられる幸福論は多いが、死の直前に自分の一生を振り返って、自分は与えられた限られた環境の中で常に人間として最善を尽くしたと自覚できるとき、またあの時にあゝすればよかったという後悔のない生活だったとき、また自分で自分をいとおしむことができたとき、それこそが本当の幸福ではないかという結論に達したことを、折に触れては思い出す。

大学教師の生活へ

さて、戦争体験から教育の道への経過については以上のとおりで、東京学芸大音楽教育学科の声楽担当教官になったのは、昭和46年4月であった。ここでは初等教育、中等教育、特別教科（高等学校）の教員養成過程の学生と大学院研究科修士過程の院生を相手に、専ら声楽と声楽教育法を個人レッスンを通して担当し、合わせて学科主任をはじめ学内の多くの役職と、学外で

は日本教育大学協会第二部の音楽部門長、日本音楽教育学会理事、日本声楽発声学会理事長などの役職を勤め、最後の4年間は附属中学校長にも併任されて、昭和61年3月に定年退官したが、翌月からは本学の児童教育学科で教科教育と声楽を担当して今日に到っている。

ここでようやく標題の“研究と教育の半生を振り返って”になるわけだが、そして研究と教育は表裏一体であることは十分に認識している心算だが、一応分けて考えてみたい。

○ 研究について

筆者の生涯をかけた研究分野は、一言でいえば“人間の声”であり、その本来の在るべき姿の探求とその修得法、声による音楽の表現法、正しい声の指導法などを含むものである。戦前に声楽の勉強を始めたころ、芸術歌曲の楽譜を分析・解釈して、楽譜の裏にある音楽そのものを掴みとり、こう表現したいと思っても、声がいうことをきかず、われながら情なく、苦勞に苦勞を重ねた。このことは声楽を学ぶ者が誰でも経験する悩みであるが、当時の音声学はまだ未熟な言語音声学であり、喉頭から上の構音や共鳴の研究が主体で、テリケートで多種多様な歌い廻しを必要とする声楽表現には殆ど役に立たなかった。そして声の全体像に関する研究文献はまだ無く、声楽履修者対象の発声法の本は訳書を含めて幾つかあったが、それらを殆ど購入して自分の身体で実験するうち、声楽表現に適した自由な声の根本は呼吸法に原因があり、その呼吸法を支えるのは身体内部の筋緊張のバランスによる姿勢であるとの確信を持つようになったのである。しかし、人体全体の生理学専攻でない筆者には、もちろんながら系統的な理論体系を築くことはできなかった。

それでも戦後に高校生を指導した際、この呼吸法指導を徹底して、息洩れのないしみじみとしたピアニッシモや叫び声でない豊かなフォルテシモを響かせて表情豊かな表現を獲得し、合唱コンクールでも上胸部から押し出す浅く強いフォルテのみの地声発声の他校の合唱の中で際立ち、好結果を得ることができたのは、自信に繋がってきたのである。

ついでながら、戦後の普通教育の現場の歌唱教育に触れると、昭和26年の小学校学習指導要領(第2次試案)にCIE(占領軍の民間情報教育局)の指示で、児童の歌唱発声に“頭声発声”ということばが載り、教育現場では何のことか皆目分からず、文部省は仙台の南材木町小にこれについて3か年の研究協力校を委嘱した。結果は30年にレコード付きの研究報告書が出版されたが、柔らかで澄んだ音色でよく透る声という感覚的表現が主で、その様な声が生れる生理学的解明はされていなかった。そのため現場の先生方はレコードを聴きその音色を真似て、児童に弱声発声を強い、蚊の鳴くような歌唱が広まったが、その反動として児童の自己顕示欲を解放させると稱してまた戦時中のような大声の地声発声が復活してしまった。明治の日清・日露の戦争当時から、子供たちは叫び声に近い大きな地声で軍歌を歌い、その習慣から学校唱歌もノド声の大声で歌う悪弊に気付き、大正末期に北原白秋や山田耕筰によりすぐれた芸術的な子供の歌が作られたころ、福井直秋、草川宣雄・田村虎蔵氏らの先覚者が子供の歌唱発声について研究して、中声とか頭声とか弱声を提唱したが、昭和初期からの軍国主義的社会を背景にまた地声を張り上げるようになり、先覚者の研究成果はわが国の教育界に根付かず、CIEに指示されるまで暗中摸索だったのである。“頭声”というとは概念や生理学的解明は後述するが、現在の学習指導要領でも“頭声的発声”と指定されているのに、教育現場に定着していないという状態である。

昭和39年頃になると、東京芸大で音声学を講ずる須永義雄氏と著名な声楽家や教師が、「発声指導法研究会」を組織して芸大オペラ科主任の柴田陸陸氏を理事長に、従来の家元的指導を排し、協力して声の在るべき姿の解明とその指導法を研究しはじめたのは、日本の声楽界にとっ

てまことに画期的なことであった。既に1945年頃にドイツのフースラーの「SINGEN」や、アメリカ南カリフォルニア大のヴェナードの「SINGING」により、声に関わる人体全体のメカニズムや筋肉の生理学がほぼ確立されていたが、これらが日本に入ってきたのは昭和30年代の終りであった。「発声指導法研究会」では、早速にフースラー理論の研究や追試をやり、昭和46年からは「日本声楽発声学会」に発展、現在では日本学術会議の登録団体として、外国との交流も多く、活発に活動している。筆者は都教委指導主事時代より加入して、何度か研究発表をやり、昭和58年からは理事長をつとめ、現在は相談役として関わりながら、研究は継続して成果を本学の授業にも活用している。これまでの研究過程で、昭和54年秋に文部省在外研究員として2か月間、ハンブルク、ミュンヘン、ウィーンなどの各国立音楽大学で、声楽発声の指導の実態を調査・研究に赴いたが、発声法担当の各教授たちは挙ってフースラー理論を高く評価し、個人レッスンもゼミもクラス授業もすべてそれによっていた。その際にミュンヘンの発声担当のリュウディガー教授に「日本からたいへん多くの留学生が来ているが、彼等の共通した欠点は何ですか?」と尋ねたところ、「例外なく浅い呼吸で咽喉をつめた固い非生理的発声で、匡正するのに苦勞する」と答えられたのは、“むべなるかな”の感を深くするとともに、今後の学生指導において留意すべきことと痛感した次第である。

このようにして「声」を見直したとき、現在はいきなり言えることは、人間が持って生まれた本来の声（これが歌声である）とわれわれが日常会話に使っている言語音声とは、次の4点で生理学的に明らかな違いがあるということである。言語音声は各自が勝手に身につけた声で、全身の発声器官の一部を偏って使う非生理学的発声であり、いわば病的な声なのである。言い換えれば、話し声の出し方をいくら強調しても、満足に歌を歌えないばかりか、咽喉の炎症の原因になるということである。政治家や香具師の“ダミ声”は、この不自然な声の出し過ぎによる結果なのである。声帯の慢性肥厚→ポリープ→喉頭癌と進み死亡に至った実例もあるのである。

歌声と話し声の生理学的差異の4点

- ① 呼吸法
- ② 喉頭の位置
- ③ 共鳴腔の形と大きさ
- ④ 声帯の緊張・振動様式

①について

就寝時のように仰向けに寝て、無意識に口をふさぎ鼻を通して穏やかに安静呼吸をしているとき、外肋間筋と横隔膜筋の緊張で、吸気は左右の上肺葉と右の中肺葉（左は心臓があって中肺葉はない）と左右の下肺葉の5ブロックにはいつてくる。呼気は上記の二つの吸気筋の緊張が神経支配で止まると、自動的に肺の中のCO₂の多い空気が出て行く。これが生理的呼吸で歌声ではこの呼吸法を使うが、話し声の呼吸は上胸部の外肋間筋と内肋間筋により上肺葉主体の呼吸のため、呼気は短時間に強い圧力で逃げて行く。その呼気を引き伸ばしたり区切ったりするのに、大切な声帯をブレーキに使うので、固い息洩れの声で、しみじみしたピアノッシモも豊かなフォルティッシモも不能で音量の差はあまりつかない。前者の歌声は呼気のコントロールに、腹圧を高める内外の腹斜筋（これが呼気筋）と外肋間筋および横隔膜筋（この二つが吸気筋）の対応で横隔膜のあたりでコントロールし下の呼気筋の力が僅か勝ったとき柔らかな息が上ってくるので、声帯は声作りの緊張だけでブレー

キ役をする必要なく、強弱自由の息洩れのない澄んだ喉頭原音を作ることができる。この呼吸法の差が、音楽表現可能な美しい本来の声とダミ声を分ける90%の原因である。

②について

歌声の場合は、声帯を中に持つ喉頭という軟骨枠組みは、4方向ある外喉頭筋がすべて働いて、結果として喉頭は低い位置にある。話声の場合は、飲食物を嚥下するときのように前上方の外喉頭筋である甲状舌骨筋のみ働いて、結果として喉頭は高い位置にある。

③について

②と関係深いが、歌声では咽頭腔、口腔、鼻腔の3者が1体となって、容積の大きな形のよいラッパとなるが、話声での共鳴腔は形の悪い狭い口腔のみで、出てくる声は平たく浅い声となる。

④について

声の元の喉頭原音を作るとき、声帯内筋が働いて厚くなった声帯の全長・全幅・全厚が振動して出てくる声が、胸声（胸に響くような感じがするのでこういうが、これは西欧でも同じで感覚的表現であり、胸に響く場所はない。）や地声の声であり、歌声の低音部分でも使うが、話声（その個人の持つ声域の下方4分の1位の低い声）はすべてこの緊張振動様式である。歌声の高音や弱音を出すときは声帯の両端の前後の骨を別の筋肉で離し、前後に引き伸ばされて薄く細長くなった声帯の声門側半分くらいの部分の振動で出すのであり、これを頭声（これも感覚的表現で、頭には共鳴場所はない）というが、裏声やファルセットもこの方式である。結局、歌声は2つの声を混ぜて広い音域の声を出す、話声は胸声の方式のみである。

さて、この4点を本来の声すなわち歌声が出るようにするには、①から④を順に習得するのではない。姿勢の匡正で一挙に解決するが、ここでいう姿勢は外見の形ではなく、身体内部の筋緊張のバランスであり、特に内部背筋である仙棘筋により背すじをシャッキリと伸ばし、肩・頸部・下顎を完全に脱力することが大切である。履修者が知らずに身につけた悪癖は千差万別で、指導には誰にも向く特効薬的方法はない。教師は鋭敏な聴覚で、履修者の身体の何処に余計な緊張や弛みがあるかを診断し、個々の履修者の匡正法を組み立てなければならない。一斉指導で可能な部分もあるが、個別指導が絶対に必要である。筆者は、永年の研究から不自然な声の原因を聴き分ける聴覚を身につけて、個々の履修者の欠点を匡正してきたのが、さきやかな研究成果といえようか。

声楽にしる器楽にしる、実技に関することは文字だけで表現したり伝達することは不可能で、実音を通さなければ目的は達成できない。上記の小文もその意味でアウトラインを一部記したのみであるので、興味・関心のある方は、筆者の研究室を遠慮なくお訪ねいただきたい。実際の声を通してご説明申し上げる所存である。

○ 教育について

筆者は、前半に述べたように声楽家として歩み出しながら、教育実践により生き甲斐を見出し、今年度を終ると教職歴は満50年になる。したがってここでいう教育とは、教育学でいう厳密な理論ではなく、普通教育と専門教育を通して現場で体験してきた実践的教育であり、主として大学における実践の跡の概略を振り返ってみたい。

大学はもともと学問や芸術を純粹に研究し教育するところで、そこで学んだものを社会でどう活かすかは卒業生自身の問題であり、教育者養成を主目的とする大学・学部でも例外でなく、昔の教師養成専門の師範学校のような目的大学ではない。本学の教育学部児童教育学科も、児

童教育学を研究・教育するところで、初等教育教員の養成を目的とするところではない。

しかし、入学してくる学生諸君は将来小学校教員になるのを目標として、教員養成をするところという認識で入学してくる。筆者はこの現実を踏まえて、将来普通教育の小学校で活躍する、あるいは活躍できる教員を育てるという立場で、教育に当たってきた。専門分野からいえば、声楽家を育てるのではなく、子供たちに歌のよろこびを教育できる資質と能力を持った教師を養成するという目的で努力してきた。したがって前段の研究もそれとの関連に力を注いだつもりである。

筆者は10年前に本学に赴任したとき、前任校や他大学に較べて、本学の学生気質の特異性にいささか驚いた。それは、素直で温和しく、真面目で人が好いという美点がある反面、主体性とか学問的意欲が乏しく、学生としての生き方が受動的で、やゝ心許なく見えたのである。極端な例え方をすれば、雛鳥が巣の中で親鳥の運ぶ餌を大きな口を開けて待っている如く、教師側から与えられるのを受身で待っているだけで、小・中学校の義務教育の児童・生徒と変わりなく、大学生の勉学態度に見えなかったのである。目前の各県教委の教員採用試験には実技試験があり、これだけの歌唱能力や楽器の演奏能力が必要だから、入学時から寸暇を惜しんで練習しなさいといっても、そして本学にもそのための個人練習室が多数用意されているのに、殆ど歌声もピアノの音もしないで静まり返っていたのである。教師の側では、年間30回ぐらいの僅かな授業時間でこれだけの力をつけてやりたいと計画的に授業をやっている、欠席が多くて知識も能力も身につかない学生が多々あって驚くばかりであった。甚だしいのは出席簿を覗きにきて、あと何回休めるかを確かめる学生すらいたのである。要するに“教わる”と“学ぶ”の違いについての認識もなく、自分の好悪で毎日を過ごし、出席日数不足で単位を落とさないでいかに教室に出て座っているという、およそ大学生といえない学生も一部には存在していた。そのような学生に、君は自分の将来に向けての長期的生活設計が不十分ではないかと注意を喚起しても返答はなかった。万一このような学生が教採試験をすり抜けて教壇に立ったら、教わる側の次代を担う子供たちの不幸はこの上ないと、淋しい思いをしたものである。もちろん上記のような学生は数は少なく、頼母しい学生も多くいて筆者は救われたが、概して積極性に乏しいという傾向が見受けられた。

教育界では昨今、従来の文化伝達型の教育から、自分で問題をみつけて解決する自己教育力とか新学力観の育成型の教育が叫ばれているが、少子化に伴い教員需要数も減少し、これから教員になるのは、ソフトもハードもますます厳しくなった。教員志望の学生諸君は、未来を見詰めながらいま何を為すべきかと、学生生活の本質についていま一度深く考えて欲しいと願う次第である。

昨年、「創大教育研究第5号」の特集「戦後の教科教育50年」の中で、主として小学校の「音楽科教育」について拙文を書いたが、その末尾に〈現時点での問題点と21世紀への展望〉としてやゝ詳細に私見を述べたので、こゝでは簡略にとどめるが、小学校現場における指導実践や教科目標達成度が決して望ましい状況ではない原因として、次の2点を指摘した。その1は〈教員の資質と能力の問題〉であり、その2は〈再構築を迫られる学校教育理念の問題〉である。その1については、本年7月29日に文相より教育職員養成審議会に諮問された「教員養成の改善方策」において、専門職としての新しい教師像の構築やそれに向けての明確な育成システムの検討が始まった。拙速では困るが、急を要する問題なので1日も早く法整備に向けての努力が望まれる。これができ次第、本学の児教のカリキュラムも大きな改訂を迫られるであろう。その2についても、学校週5日制に伴う時間数削減や教科再編についての抜本的見直しは、教育課程審議会に最近諮問されたようである。いずれにせよ今後ますます大きな変化が押し寄せるこ

とが考えられるこんにちである。次に、最近では電子工学や生物工学などの自然科学の著しい発達に伴い、社会や文化に大きな歪みが生じているのが指摘されている。たしかに文化全体が細分化しすぎて元の全体像が不鮮明になり、再び統合が叫ばれている。その過程で大切なのが学問の学際化であると思われる。各自の専門分野を狭く深く研究するとともに、隣接分野にも視野を広げないと、思わぬ方向で無意味な結果に終る可能性もあるのではなからうか。17年前にハンブルクの国立大で、物理学研究の日本人研究生から、既に物理学の最先端では化学の最先端と境界線が曖昧になっていると聞いたのが耳に残っているが、筆者の専門分野の声の研究でも、人体生理学や心理学との学際的研究の必要性を痛感する昨今である。

まだまだ大学における教育については、大学側の教育態勢や教員配置などを含めていろいろあるが、紙数も尽きたので別の機会に譲り、一応ペンを擱くことにする。

おわりに

昔、海軍という一つの社会では、配置については上部からの命令に絶対に従うが、与えられた職責上、少しでも自信が揺らいだり、無責任になるおそれが生じた場合には、潔く自ら身を退くことが貴いとされた。進退は自ら決すべしというのである。筆者は人一倍頑健な身体とファイトで、これまで努力してきた心算だが、最近では意欲に較べて体力の衰えを自覚するようになり、心ならずも無責任になるようなことが起こってはと案じ、前記のことと同じ考え方から、このたび依頼退職を申し出た次第である。

大学を去るにあたり、是非とも学生諸君に伝えておきたいと思うことを、アウトラインに過ぎないが長々と書き連ね、あるいは退屈されたかとも思う。まして前半は、現在の学生諸君には遠い昔の物語りで、いまの自分の将来とは無関係と思う向きもあるかも知れないが、紛れもなくいま諸君が立っているこの国の極めて近い過去の歴史の一大局面であり、日本人ならびに日本文化の特質を考える上で、外すことのできない大事な資料であると思う。筆者が書いたのは、筆者の自分史でなく、同世代の友の生と死を想いながら、いつの世にも青年は純粋に誠実に生きようとするものであり、人として最善に生きることがすなわち死であった特殊な時代が、半世紀前に現実にあったということである。これを契機に戦没した先輩学徒の生の遺稿を熟読し、その魂に触れていただきたく思う。

戦争による死は絶対にあってはならない。しかし諸君の先輩達は、愛する者たちの幸せを祈りながら、黙って死んでいかざるを得なかった。戦後の日本は、この事実に対して何をやってきたのだろうか。戦争責任を外国および日本国民に対して明確にしてきたかどうか。平和憲法の公布で事足れりとしていないか。その憲法すら時の政府が勝手に解釈してないか。いまの平穏な毎日がこのまま続く保障は何処にもない。どうか無自覚に惰性で“生きちゃっている”でなく、時々刻々を意識のもとに“生きてる”と言えるような、借り衣でない主体的な生き方を築くため、社会や人間を厳しく見詰め、人生の折々の選択を誤りなく、今なすべきことを的確に遂行していただきたくと、心底から切に祈る。

最後に、非常勤を含め14年間お世話になった本学のますますのご発展と、特に並々ならぬご指導とご交誼をいただいた前学部長、および現学部長以下諸先生の一層のご健勝とご活躍を心より祈念し、あわせて学生諸君の輝かしい将来を祈り、御礼のことばに代えさせていただく次第である。まことに有難う存じました。